

早稲田大学大学院創造理工学研究科

# 博士論文審査報告書

## 論文題目

H.P.ベルラーへの建築理念と意匠的特質に関する研究

Studies on Architectural Thoughts and Design Characteristics  
of Hendrik Petrus Berlage

申請者

宇田	直史
Naoshi	UDA

建築学専攻 建築意匠論研究

2011年7月

ヘンドリック・ペトルス・ベルラーヘ（Hendrik Petrus Berlage, 1856-1934）は、1880年代後半から1930年代前半にかけてアムステルダムとハーグを中心に活躍した、当時のオランダを代表する建築家であり、代表作としては、アムステルダム証券取引所（1903）やハーグ市立美術館（1935）が挙げられる。著者は、これまでベルラーヘに関しては、P.シンゲレンベルフやM.ボックによるモノグラフを先鞭としてオランダを中心に多くの研究がなされており、多様な思想的背景が明らかにされつつあるが、例えばベルラーヘが合理主義の建築家として、社会民主主義を信奉する建築家として、表現主義とされるアムステルダム派の抛りどころとして、というように様々に捉えられてきたことは、その評価が定まっていないことを意味するとし、それは、一次史料に基づいてベルラーヘの本質的な建築理念を実証的に論究するという基礎的な手続きが十分ではなかったこと、また、建築作品の意匠的特質について、建築理念との対応関係という観点から一貫した考察がなされてこなかったことによるものと指摘する。著者は、既往研究におけるそうした問題点を踏まえ、本論文の主要な目的として、まず第一に、ベルラーヘの著書や講演録といった蘭語や独語の一次史料を精読したうえで多様な思想について論究し、そこに通底する建築理念を明らかにすること、第二に、建築作品の意匠的特質について、設計図面等の一次史料や現地調査を踏まえ、建築理念との対応関係から論ずることを挙げている。本論文は、これらの作業を通じて、ベルラーヘの建築理念と意匠的特質の体系的な把握を試みた先駆的論文であり、従来のベルラーヘ研究とは峻別されるべきものといえる。

本論文は、序論3章、本論5章、結論の構成をとる。序論第1章では、まず本論文の概要を述べ、次にオランダ国内におけるベルラーヘに対する関心の度合いを示し、次にベルラーヘの生涯を年代記的に整理し、最後に論文構成を提示している。第2章では、既往研究のレビューを行い、本論文の目的と範囲を規定している。オランダを中心とした海外の最新の研究成果を踏まえ、研究すべき課題の所在と、本論文が対象とする範囲を明示したことは評価に値する。第3章では、研究方法、及び一次史料の内容と所在地を示している。公刊されたベルラーヘの24冊の著書をはじめとして、講演録、設計図面といった膨大な一次史料を、オランダ国内の各種アーカイブや関係者との面接を通じて収集することにより、既往研究では取り上げられていない史料をも入手し、その主要な著書の着実な翻訳作業によってベルラーヘ研究の確固たる礎を築いたことは、今後の研究にとっても多大な利用価値を有するものとして高く評価される。

本論第1章では、ベルラーヘの多様な思想の社会的背景を捉えるため、19世紀半ばから第一次世界大戦頃までの間のオランダ社会について、政治、経済、工業化、労働組合運動、社会主義運動、住宅・都市問題、文芸運動の相互関係の考察を通じて、オランダ社会のあらゆる側面における急激な変動の様相を明らかにしている。第2章では、ベルラーヘの建築理念と意匠的特質をより鮮明にするため、

ベルラーヘを取り巻くアムステルダム派、デ・ステイル、機能主義といった建築グループの理念的、造形的特質について考察を行っており、それらの建築グループとベルラーヘとの間には、建築を通じて社会に対して理想像を示したり、諸問題を解決する理念なりを示そうとしていたという点において共通性が見出せる一方、具体的な建築理念や意匠的、造形的特徴においては大きな差異が存在したことを明らかにしている。ベルラーヘの周辺の建築グループを比較検証したことは、同時代性の把握という観点から意義が認められる。第3章では、第1章で指摘した既往研究における問題点を踏まえ、ベルラーヘの著書、講演録等の一次史料における言説の読解を通じて、本国の研究も含め、従来ベルラーヘ研究にあっては個々に論じられてきた多様な思想や概念について系統的に考察している。そしてベルラーヘが、1880年代のオランダ文芸運動の個人主義性に対する批判に端を発し、1890年代から1900年代初頭にかけて、個人よりも上位の普遍的な精神、共通の世界観に基づく建築や芸術を目指すという理念を確立したのち、社会民主主義、コミュニティ・アート、合理主義、ザッハリッヒカイト、標準化などの様々な思想や概念を受容したこと、しかしそのまま受け容れるのではなく、物質的側面と精神的側面の調和というシンクレティック（混淆的）な思考態度によって普遍的なものに繋がるという独自の考えを把持していたことを論証している。個々別々のものに見える多様な思想の中に、ベルラーヘの一貫した建築理念を看破し剔出した著者の論究は実証的であり、従来研究では捉えきれなかった実像の一側面を解明した特筆すべき成果である。第4章では、既往研究では取り扱われてこなかったベルラーヘの中期から晩期にかけての建築思想の把握を試みている。まず、第一次世界大戦がオランダの知識人に与えた思想的影響を考察し、次にベルラーヘが1923年に蘭領東インドを訪れた際の紀行である『私のインド旅行』を中心に考察を行い、ベルラーヘが、その晩期において「特殊性」の理念を示し、「普遍性」の理念と「特殊性」の理念の調和を建築のあり方の理想としたことを明らかにしている。これまでオランダ国内においても全く考察されてこなかったベルラーヘと蘭領東インドとの関係について明らかにした点には新規性が認められ、また今後の研究への発展性も大いに認められる。続いて著者は、第3章及び第4章をまとめたうえで、「普遍性」と「特殊性」の関係について、ベルラーヘが芸術の発展段階を意識しており、ベルラーヘが生きた時代にあっては、行き過ぎた個人主義に対する反省として普遍的なものを目指すべきであると認識していたことを明らかにしている。第5章では、ベルラーヘの建築作品の意匠的特質について考察がなされている。まず、ベルラーヘの建築作品を定石的な系譜の捉え方によって概観している。次に、ベルラーヘが、第3章における考察を通じて明らかになった「物質性と精神性の調和の上に成り立つ『普遍性』」という建築理念と、「現実的な素材・構造が、美的表現の元素因であり、芸術はそこに拠りどころを得て、それを象徴化するもの」というG.ゼンパーの建築被覆論における一貫した

建築観との相互検証を経て、理念的な水準を実践的な水準にまで落とし込んだと論じている。著者は、ベルラーヘがゼンパーの建築被覆論に依拠しつつ、建築の本質を「空間を囲うためにさまざまな要素を一つへとまとめて組み立てていく構造の芸術」と定義したことを受け、「さまざまな要素を一つへとまとめて組み立てていく構造」を現実的な素材や構造そのものを示すものとして「構築性」と称し、「空間を囲うこと」を素材や構造を超越した象徴性を示すものとして「囲繞性」と称している。そのうえで著者は、ベルラーヘが、レンガの組積造や鉄筋コンクリートの架構式構造（結構）における両者の調停のあり方を建築意匠として表現すべき主題として定めたのだと仮説し、ベルラーヘの建築作品の系譜の再構成を試みている。まず、1890年代半ば以降の作品について考察し、ヘニー邸、ダイヤモンド労働者組合本部、アムステルダム証券取引所において、様々な装飾的形象化の追求によって生まれた被覆性を経て「囲繞性」がもたらされ、「構築性」と「囲繞性」をレンガの組積造の中に併存させるという独自の意匠的統辞法に到達したことを明らかにしている。次に、1910年代から20年代にかけては、国家的規模で行われた住宅建設において、社会に奉仕する建築家の職能と意義を主張しつつ、「標準化」に経済効率的な側面のみならず芸術的な側面を見出していたと論じている。1920年代半ば以降は、鉄筋コンクリートの架構式構造における「構築性」と「囲繞性」の調停のあり方に取り組み、遺作となったハーグ市立美術館において、一定の到達と統辞法を見出したことを明らかにしている。第5章を要するに、著者は、ベルラーヘが「物質性と精神性の調和の上に成り立つ『普遍性』」という建築理念をヨーロッパの史的現実の中から学びとり、実践においては「構築性」と「囲繞性」との相互嵌入の上に成り立つ芸術的建築表現を模索したと考察している。この考察を通じて著者は、ベルラーヘの建築作品の系譜を、時代や社会の要請としての建築構法や技術を積極的に取り入れつつ、ゼンパーの言う「現実性」に象徴性を付与することによって建築に芸術性をもたらす意匠表現を模索した連続的な過程として捉えており、これは従来の建築作品の系譜の断絶的な捉え方を克服したものとして高く評価できる。結論では、上記の研究成果と、各章の考察結果の要約をもって本論文全体のまとめとしている。

以上を要するに、本論文はオランダ近代建築の萌芽期に活動した H.P.ベルラーヘの建築理念と意匠的特質に焦点をあて、その体系的な考察に初めて正面から取り組んだ先駆的な試みであり、その研究成果は建築学の発展に寄与するところが大きい。よって、本論文は博士（工学）の学位論文として相応しいものと認める。

2011年7月

論文審査員

主査	早稲田大学理工学術院教授	工学博士（早大）	入江 正之
副査	早稲田大学理工学術院教授	工学博士（早大）	中川 武
副査	早稲田大学理工学術院准教授	博士（工学・早大）	中谷 礼仁